

「世界の課題、日本の課題」

黒川清 日本学術会議会長

黒川清日本学術会議会長を講師に迎えた特別企画1では、「世界の課題、日本の課題」と題した講演が行われた。黒川会長は、冒頭、「今、千一世紀の初めにあって、これからの世界の課題、日本の課題は何か、世界を動かしていく因子は何か。さらなる人口増加、環境劣化と地球温暖化、そして拡大する南北格差ではないか。このような状況下における日本の課題は何か。歴史、文明史、そして世界の動向を見ることから、これからの世界・日本の課題を予測してみたい」と抱負を語った。座長は池田会頭が務めた。

過去の歴史に学んで 二十一世紀の課題を考える

黒川会長は、激動の二十世紀を振り返った上で、その最たる特徴として、人口の爆発的な増加を挙げた。

「西暦がはじまった当初は全世界で一億人だったものが、ようやく二億人になったのは一〇〇〇年のこと。その後、一五〇〇年頃には五億人、一八〇〇年には十億人、一九〇〇年には十

The 103rd Annual Meeting of Internal Medicine

六億人。それが二〇〇〇年では六十億人とこの百年の間に爆発的に増加し、現在では六十五億人とされる。かつて千年かけて倍になっていたものが、この百年で四倍になったわけだ。同じように平均寿命についても、ローマ帝国時代には二十五歳だったものが、一九〇〇年には四十五歳、二〇〇〇年には八十歳になった。十五年増やすのに千九百年かかったのが、この百年の間に四十年も増えてしまった。現在世界の先進国は高齢化社会を迎え、地球上の人口は二〇五〇年には九十億人になると予測されているが、それもつい百年前まではそうではなかった。現在の社会は、たった百年の間に築き上げられたものに過ぎないのだ」

では、二十世紀に一体、何が起ってこのよ



黒川清 日本学術会議会長

うな激動の変化を遂げたのか。黒川会長は、その端的な例として、科学技術の進歩を挙げ、「アイシユタインが相対性理論を発表したのは一九〇一年。その後、人類が核分裂に成功したのは一九三八年。その七年後の一九四五年、日本に二発の原子爆弾が落ちた。たった七年の間に、実験から兵器へと転用されたわけだ。実は、そこには戦争という状況が密接に関わっており、マンハッタン計画という人類最大の国家計画があった。現在では、日本の電力の35%が原子力によって賄われ、当たり前のようにその恩恵にあずかっているが、百年前に誰がそんなことを想像できただろうか。二十世紀の変化を生み出したものは、第一次大戦、第二次大戦、そして冷戦という三つの戦争に対する投資が一番大きい。その投資によってもたらされた科学と科学技術の急速な進歩と生活の大きな変化、都市化などによって、現在にいたる人口増加、寿命の延長がもたらされた。当たり前だと思っていることは、本当は当たり前ではない。何があってそうなっているのかを学ばなければ、これから先に何があるのかも分からない」と述べ、二十一世紀の課題を考える上でも過去の歴史に学ぶことの必要性を強調した。

改革には医師自身の発言が不可欠

次いで、黒川会長は、現在変革期を迎えている日本の医療について話を転じ、今後の医療政

策を論じる上で、重要なポイントとなる、予防、診断と治療、高齢者と終末期医療の領域について、一九六四年と二〇〇五年時を比較して以下のように語った。

「六四年当時、予防については結核、BCGとツベルクリン、栄養調査など、主に保健所の機能とされていた。診断についてはレントゲンぐらいしかなかった。診療所の医師は、血糖を測り、血圧を測り、時間をかけ、地道な問診を行っていた。大病院は特別な場所であり、気軽に受診できるような場ではなかった。高齢者の死因は主に脳卒中、結核、胃がんなどで、医療機関で亡くなる方は全死亡の30%に過ぎなかった。それが〇五年、疾病構造は大きく変化し、結核は減少し、生活習慣病がメインになっている。誰でも気軽に大病院を受診することができ、外来は三時間待ちの三分診療といわれるほど混雑している。患者の多くは高齢者で、医療機関で死亡する患者は全死亡の85%を占めるようになっていた」

黒川会長は、現在、どこの大病院も人手不足に陥っており、医師は慢性的に過労状態にあることについて触れ、「何故、大病院の医師は患者から三分診療について文句を言われたら『他へ行けばいい』と言わないのか」と指摘。「本来、大病院は慢性疾患の患者を外来で診るような場所ではない。医師自身がそういうことをパブリックに発言していかないと現在のこのような状態になってしまった。医師の数、専門

医の数、医療のシステムを効率的に運営していくためには、自分達で発言していかねばならない」と述べた。また、それほど大きくない一つの地域に国立病院、国立大学附属病院、県立病院、市民病院など複数の公的医療機関が存在し、それぞれに診療科が設けられているという状況について触れ、「そのくせ医師がいない、小児科医が足りない、産科医がいない、救急ができないと言っている。それらを一箇所にまとめて医師数を確保し、そこで二十四時間の救急診療を引き受けなければいい。何故そういうことを主張していかないのか」と指摘。平成十八年度より、医療計画は各都道府県で立案、作成するものとなったが、今後、公的病院の役割と責務、公的資金の使い方について、より効率的な医療を行っていく上で、地域の医師は社会的責任のある立場として医療計画の策定に携わっていくことの必要性を唱えた。

また、医療政策の策定についても「霞が関は行政機関であって、そもそも立法府ではない。本来であれば国会で決まったことだけを実行するだけの存在。それにもかかわらず、現在の法律のおよそ95%を政府案が占めている。きわめて不健全な状態だ。医療に関して独立したシンクタンクが存在しないなら、われわれ医師が発言していかねばならない。今後、日本医師会、日本内科学会、いわゆる一流大学と呼ばれる団体は、どういう人材を育成していくのか、という立場で考えて、これからの医療制度を改

革していかなければいけない」と述べ、とくに、日本内科学会が果たしていくべき役割について「職業団体としてどうやって社会の信頼を構築するか、というのが一番の使命にある。自分達で自分達の職業全体を律するような、職業医師団体を確立しなければいけない。それこそ日本内科学会が果たしていかねばならない責任の一つだ」と語った。

二十一世紀の課題克服には 人材の育成が重要

黒川会長は、二十一世紀の課題として先に挙げた人口の増大、そして地球温暖化による環境破壊、拡大する南北格差の三点を挙げた。

「二〇五〇年には、地球上の人口は九十億人になると予測されている。また、現在地球温暖化に対し様々な対策がとられているが、二酸化炭素濃度は簡単には下がらない。少しずつ温度が上がると、いずれ北極・南極で氷が溶け、海面が上昇するだろう。われわれが地球に対し行っていることは、このように千年、二千年のインパクトがあることを忘れてはいけない。南北格差も重要な問題だ。現在でも、地球上の20%が極貧状態にあり、一年間に千六百万人が餓死している。二百万人の子どもが単なる下痢で命を落としている」

黒川会長は、これらの課題を克服するため、世界規模で地球環境サミット、ミレニアムサミ

ットが催されていること、また日本学術会議が二〇〇二年に「日本の計画」、二〇〇五年に「日本の科学技術政策の要諦」を出していることについて触れ、「二〇五〇年までに目指すべき日本の国家ビジョン」として『品格ある国家』

『アジアの信頼』が掲げられている。すべては、国づくりの根幹をなす人材の育成にかかっている」として人材育成の重要性を強調した。その上で、世界の高等教育の動向について触れ、「ハーバード、ケンブリッジ、プリンストンなどは、学部教育の重要性を認識している。みな研究者になるわけではない。学部からどういった人を卒業させたいのかというのが、世界の一流大学の一番の重要事項になっている」と述べ、これら世界の一流大学は、様々な国から学生が集まり、国際化しているのに対し、日本では少子化、法人化、未だに偏差値教育の中に置き去りにされていることに警鐘を鳴らした。

「たとえば、プロテニススのプレイヤーは何よりもウィンブルドンで勝ちたいと思っている。何故なら、ウィンブルドンは歴史のある大会であり、どこの国のどんなプレイヤーに対しても完全にオープンな大会だからだ。このような国際的にオープンな大会を開催することで、世界からその国はどういう国なのかを知ってもらえる。日本の一流大学と呼ばれる大学も、世界の一流大学に倣ってオープンにすべきだ。学生の三分の一を海外からとすることで、学生は多様な人と触れあうことができる。それによって多くの

人に『日本はいい場所だ』そう思ってもらおうことこそ、国家の安全保障の根幹ではないのか」

私たちは賢くなったのだろうか？

黒川会長は以上のように二十一世紀における日本及び世界の課題について語った上で、最後に過去の賢者の言葉を以下のように紹介した。

「私たちの進歩は豊かな社会をもっと豊かにすることではない。持たないものたちを十分に援助できるか、これが一番大事なことなのだ。(フランクリン・ルーズベルト)」

「大学の第一の義務は生きる知恵を教えることだ。ビジネスを教えるのではない。人格形成であって、技術の習得ではない。現代の社会にはたくさん技術者が必要だ。だが、技術者の世界が欲しいわけではない。(ウインストン・チャーチル)」

「子どもは何かを詰め込む器ではない。もえる火となるよう灯すのだ。(カール・ガストフ)」

「共産主義は経済についての真実を告げなかったから崩壊した。資本主義は環境についての真実を告げない。だから崩壊するかもしれない。(レスター・ブラウン)」

「地球は私たちの必要は満たしてくれない。しかし、欲望は満たしてくれない。(マハトマ・ガンジー)」

「社会で高い地位にある人ほど、社会への責任は重い。そのような人は問題が起った時、

それに対し、できない理由を言う前に何ができるかを考え、行動に移すことが求められる。しかし残念ながら、そんな人は特に日本には少ない。何故か。そのような立場の人は評論家ばかりで、当事者であることの意識が薄いからだ。賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ。何故、竹島が一九〇五年、日本の領土になったのか。きちんと分かっているだろうか？ それを論じるためには、その背景を知らなければならぬ。歴史を学ぶということは、それを分析することではなく、歴史を知り、そこから現在を見て、さらに将来を予測することだ。確かに、インターネット、テレビによって知識そのものは増えた。多くの情報に簡単にアクセスできるようになった。しかし、私たちは賢くなったのだろうか？ よく考えてみてほしい」

